

山本多香良氏卒業論文 『湿地と島の文学論－アイスランド現代小説を中心に－』講評
齊藤みどり

山本多香良『湿地と島の文学論－アイスランド現代小説を中心に－』

本論文は、都留文科大学比較文化学科に提出された卒業論文である。

山本氏の論文は、アーナルデュル・インドリダソン(Arnaldur Indriðason, 1961-)の『湿地』の考察と分析を中心にまとめられたものである。日本では研究の少ないアイスランド文学の紹介であること、さらに対象作品の『湿地』は先行研究が乏しいミステリー作品であることから、非常に意欲的な研究として評価される。山本氏は語学に長け、またその調査能力と文章力も非常に優れており、将来が嘱望される研究者である。

コメンテーターの立場

コメンテーターの齊藤は英語圏文学・カリブ海域の文学を専門とする研究者である。都留文科大学文学部比較文化学科には、文学系のゼミ担当者は齊藤しかおらず、山本氏は齊藤のゼミに所属した。しかしながら、ゼミだけでは十分な指導ができないため、人魚研究会主催者の中丸禎子先生にご指導をお願いした。本卒業論文は、中丸先生と研究会の皆さまのご指導のお陰だと深く感謝している。

論文の要点

『湿地と島の文学論－アイスランド現代小説を中心に－』は、アイスランドの著名な作家であるアーナルデュル・インドリダソンの『湿地』という作品を、ミステリー小説、島の文学、湿地の文学という3つの側面から考察し、評価をしたものである。

第1章では、ミステリー小説には娯楽以上の価値があり、社会を色濃く反映したものであるという観点から、ミステリー小説は考察に値するべきであり、『湿地』では個人と国家権力や遺伝など人間にとって必要なテーマが問われていると述べる。

第2章は、『湿地』が舞台となっている島という地理的な特質が作品の根幹にあるとし、かつてアイスランドが「夢の島」として描かれてきたのに反し、『湿地』では「実験場としての島」または「チェスの駒としての島」として描かれていると考察している。

第3章では、エドガー・アラン・ポーやトルーマン・カポーティの文学作品では湿地に負のイメージが与えられているのに対して、アーナルデュル・インドリダソンは、湿地に、開発や機械化などの近代化に対抗するトポスとしてのイメージを与えていると論じている。

山本氏の論文の功績は、『湿地』というミステリー小説を、ポストコロニアルな文脈で読むことの可能性と、エコクリティシズムの観点から読むことの可能性、そして島嶼文学として読むことの可能性を示した点にある。

ポストコロニアリズム的作品分析としての評価

ポストコロニアリズムとは植民地主義に関する文学や歴史や批評する動きの総称である。ポストコロニアル批評として有名な作品に、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』があるが、そのなかでサイードは『東洋』というものは西欧の言説が作り出した虚構であると論じている。山本氏は、アイスランドという地が、12世紀のサクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』、16世紀のオラウス・マグヌス（スウェーデン）『北方民族史(*Historia de gentibus Septentrionalibus*)』などでは世界の境界とされ、そこに生まれた者は「悪魔」として表象されていたことを突き止めた。それとは逆に現在のアイスランドは、観光に理想的な「夢の島」として描かれることが多いが、『湿地』は二つのステレオタイプのアイスランドの表象を一掃していると山本氏は考察する。

また、『湿地』は、アイスランドに色濃く残る大国アメリカの影響を捉えている。アメリカ軍はアイスランド独立以前の1941年にアイスランドに進駐し、2006年まで駐留した。「典型的なアイスランド人」とされる主人公のエーレンデュルと捜査方法などで反目するのは、アメリカで教育を受けたシグリュデュル＝オーリという若い男性捜査官であるし、アイスランド遺伝子研究所の理事はイギリスとアメリカで勉強した分子遺伝学者である。アメリカ軍が撤退した後も続く文化的ネオコロニアリズムの状況が、『湿地』には書き込まれていることを、山本論文は鋭く指摘している。

エコクリティシズム的な作品分析としての評価

エコクリティシズムという言葉は1978年のW・リュカート（William Rueckert）による“Literature and Ecology: An Experiment in Ecocriticism”という論文が初出であり、人間と自然という二つの共同体が、共存する方法を模索するための実験的批評である。いかに「自然的な」そして「社会的な」環境が相互に影響を与えているかに着目する批評の動きであるが、『湿地』はまさにエコクリティシズムによって読み解くのに最適な作品であると山本論文は論じる。山本氏は「湿地はただの舞台装置ではない」ことに着目し、湿地は近現代と対比される「未開」の象徴の場所なのではないかと提起する。『湿地』では、湿地に建てられた家の地下室を掘ることで、ひとりのレイプ犯の遺体と写真が発見される。言い換えれば、湿地を知ることが、女性への性暴力など隠された闇の歴

史を暴露することにつながる。山本氏は、湿地は、「社会の中で形成された「逸脱」と「正常」の境界の曖昧さを突きつける」と指摘しているが、これは文学作品における湿地という場所の新しい解釈を示すものであろう。

島という場所に着目した点での評価

さらに、山本論文の斬新さは、『湿地』を島嶼文学として解釈したことにある。島は「島は様々な制約、遠隔性、矮小性、隔絶性、周辺性—これらを総称した島嶼性の影響を何らかの形で受け続けている」とのステイブン・A・ロイルの言葉を引用しつつ、山本論文は、島という場所は作家にとってより「原始的な」、すなわち社会的拘束の弱い場所として描写されてきたことに着目する。

山本氏は、『湿地』において、アイスランドは、観光地としての「夢の島」、または遺传的に同一な人々が住むとされたことから、アイスランド遺伝子研究所などが設立される「実験所の島」、そしてその戦略的な位置から、外部の勢力による争いの対象になっている「チェスの駒としての島」として描かれていると指摘し、このような3つの島のあり方が『湿地』では批判的に書かれていると考察する。山本氏の指摘は、奴隷制とプランテーションを基盤としたカリブ海域の島々の文学を研究する齊藤にも、非常に興味深いものである。カリブ海の島々も、魅惑的な女性が住むエデンの庭として表象された「夢」の島々であり、レイプと混血によって優秀な人種を作り出そうとした植民者たちの「実験場」であり、冷戦化においてはキューバ危機に代表されるように、大国の「チェスの駒」であった。このように、山本氏の論文は、遠く離れた島々にも、「島嶼文学」として論じることのできるような共通項がある可能性を示唆している。

今後に向けたコメント

山本氏が論文の中で言及している登場人物の名前について、語源や他のアイスランド作品なども考慮すると、さらに面白い発見があるかもしれないとの指摘が研究会ではあった。また、研究会では、アーナルデュル・インドリダソンが記した他の作品、たとえば『緑衣の女』なども論じること、また他の現代作家の作品で、同じく「夢の島」アイスランドについて書かれてあるアントリ・スナイル・マグナソンの『よみがえれ！夢の国アイスランド』や、アイスランドの独立がテーマとなっているハルドル・ラクスネスの『独立の民』、などと比較するのも興味深いのではないかという意見もあった。山本氏の研究には、さらなる広がりや深化が期待され、今後の展開が大変楽しみである。